



瀬田川について

瀬田川は、びわ湖の最南部にあり、湖沼の水が唯一自然に流出する川となっている。流路延長は7.5kmで、京都付近で宇治川と名を変え、木津川、桂川と合流し、淀川となって大阪湾に注ぐ。

瀬田川流域は、かつて京都に通じる交通の要衝で、「瀬田の夕照」で名高い「唐橋」は、古くは瀬田橋・長橋とも呼ばれ、日本書紀にも登場する。また、風の強い日にびわ湖を船で渡るより、回り道をして唐橋を渡った方が安全だと「急がば回れ」の語源となった場所でもある。



瀬田川の現状

瀬田川流域は、宿場町として古くから栄えてきたが、川の地形や砂州の発達により水害が多く、奈良時代から開削などの治水整備が進められてきた。また、明治時代の大洪水により大がかりな浚渫が行われ、明治38年には瀬田川洗堰（旧称：南郷洗堰）が設置された。その後も洗堰の機械化による改築（昭和36年）、琵琶湖総合開発（昭和47年～）等による湖岸・河岸整備、河川流心部の更なる浚渫が実施された。

瀬田川は、かつてシジミ漁が盛んな流域で、びわ湖流域屈指のシジミ（セタシジミ）の産地であった。しかし、前述したように、昭和中期以降の様々な開発により、シジミの生産量は減少の一途をたどっている。

また、近年は、水草や藻類の湖底・川底における大量繁茂。加えてオオバナミズキンバイなどの特定外来植物が水辺で大量繁茂するようになった。水草等の大発生は、シジミを含む二枚貝等の底生物や、モロコ類やコイ・フナ類などの水辺を産卵場とする魚介類に更なる悪影響を与えており、これらへの対策が喫緊の課題となっている。



組織の設立と活動の目的・方針

瀬田川を含む南湖全域で水草が大量繁茂し、大きな問題となっていた平成25年度に、当地区の漁業者・漁協が中心となって、活動組織「瀬田川流域クリーン作戦」を設立した。体制は、漁業者・漁協だけでなく、NPOや市民団体、自治組織で構成し、県水産試験場、地元企業、大学の先生や学生等のサポートを得ながら活動を進めている。



<p>○湖底・川底の環境改善</p> <p>湖底を耕うんし、大量繁茂する水草の除去や底質の改善を図り、シジミなど二枚貝等の資源の回復を図る。</p>	<p>○水辺環境の保全</p> <p>水辺に大量繁茂する特定外来植物のオオバナミズキンバイ等を除去し、魚介類の産卵場や二枚貝等の育成場となる環境の保全を図る。</p>	<p>○環境保全に係る啓発</p> <p>町の子どもたちを対象に、特産であるシジミや漁業の魅力、またそれを維持回復するための環境保全への取組の理解を深める。</p>
---	--	---

セタシジミの復活と浅場・水辺の再生を願って

(1) 湖底・川底環境の改善

湖底・川底に大量繁茂するカナダモ類などの水草や、カワシオグサなどの糸状藻類の除去を行うとともに、底質を攪拌し、シジミをはじめとする二枚貝等の底生物の生息環境の回復を図る。

活動時期は4～2月で、年9回程度の取組を、漁業者が中心となって実施する。

(2) 水辺環境の保全

瀬田川では、平成28年頃からオオバナミズキンバイ等の特定外来植物が急増し、広い範囲で水辺を覆った。そこで、これら特定外来植物の駆除を実施し、水辺環境の回復を図っている。

活動時期は4～9月で、年4回程度実施する。駆除作業は、漁業者だけでなく、構成員であるNPO・市民団体・自治組織、また地元の企業や学生などがボランティアで参加し、実施する。

(3) 環境保全に係る啓発

大津市内にある小・中学校を対象に学習会を開催し、瀬田川やびわ湖の環境保全、特産のシジミおよび漁業に対する理解を深める。

学習会では、①シジミ掻き漁の体験、②瀬田川の環境やシジミの現状、またそれを改善するための保全活動について講義する。加えて、学習会の振り返りとして、学校で感想文等を書いてもらっている。



活動の効果と今後の課題

大量繁茂していた水草や水辺の特定外来植物は、長年の構成員の取組、また地元企業や学生等の多くのボランティアによって、大幅に減少した。ただし、これら水草等は未だ一定量繁茂しており、特に繁殖力の強い外来植物については、引き続き定期的に除去活動を行っていく必要がある。

シジミについては、活動当初に比べると生息密度が高くなってきた。しかし、未だ資源量は安定していない。また、18mm以上の親貝資源が少なく、稚貝の生き残りに課題がみられる。今後も、取組を継続するとともに、水産試験場の協力を得ながら、稚貝の生残率が悪い原因、またその対策について検討を深めていきたいと考える。

